

国語表現教育における実践的展開

——文章表現教育を中心に——

今村 みゑ子

1. はじめに

本短期大学における国語表現教育は、文章表現・口頭表現の二分野において、表現の理論を学び、実習を通してその技能に習熟することをねらいとしている。本稿は、そのうち文章表現教育を中心に、筆者の試行を通じての指導の実践的展開をまとめるものである。

国語表現という教科は少なからぬ問題を抱えている。学問分野として専門家を養成していないために、教育現場に専門家がごく少なく、教育内容や実際の指導方法の確立がなされていないというのが実情である。さらに秘書教育における国語表現教育ということになると、秘書教育という分野が新しいことと相俟って、問題は一層大きい。

平成3年度の「私立短大秘書教育担当教職員研修会報告書¹⁾」によると、現在、秘書教育を実施している私立短大253校中、「国語表現関係」の教科は223校において開設されており、秘書教育において「国語表現関係」の教科がいかにか重視されているかが窺える。しかしながら同報告書は、国語表現教育と秘書教育との関連が希薄であると指摘し、秘書のための国語表現教育を確立していく必要性を訴えている。国語表現教育も確立されていない現状の中、さらに秘書教育という枠組みをもった国語表現の教育は、いかなる目的を定め、いかなる内容を用意すればよいのか、大きな問題が横たわっているのである。

にも関わらず国語表現教育は、学校教育において、また秘書科の教育において、ますます重視される傾向にある。それは国語表現の修得が、言語生活・社会生活、あるいはビジネスにおいて、そうした領域が発達すればするほど、

必要性を痛感させられる分野だからである。

断っておかなくてはならないのだが、筆者もまた国語表現の専門家ではない。問題多い国語表現——それも秘書科における国語表現を担当して、その目的と内容をいかに定めるかは大きすぎる課題でもある。よって本稿は秘書科における国語表現教育の有り様を、筆者なりに模索している段階の、試みの論である。

2. 本校における国語表現のねらい

私立短大秘書教育に関する前記報告書は、一括して「国語表現関係」として扱い、その教授項目に、文章表現・ビジネス文書・口頭表現・ビジネスと表現を挙げている。つまり現状においては、秘書科における国語表現教育は必ずしも一定の教科内容を指すのではなく、各短期大学が、それぞれの教育目的により、また全体の教科構成等によって、独自にその内容を定めていると言えるのである。そのような実情の中で、本校は「国語表現」という教科を設けている。そこでまず、本校の国語表現の教科のねらいと内容を再確認しておかなくてはならないであろう。

本校では、報告書の「国語表現関係」に挙げられた教授項目のうち、ビジネス文書は「文書管理」が、ビジネスと表現は「秘書実務」が、それを主とした教育を担当している。つまり本校の「国語表現」は一応〈ビジネス〉という枠を取り去ったところに規定され、文章表現および口頭表現についての教育ということになる。とはいえ秘書教育という目的を有し、その実現のための教科としての国語表現である以上、単に一般的にいう国語表現の教育を実施すれば事足りるというものではない。秘書教育という目的を達成するための実際的な効果に繋がらなくてはならないのである。

ビジネス文書技能に要求されるものとしては、原稿用紙の使い方・書体・漢字・送り仮名・同音異義語・異字同訓語・漢数字・アラビア数字等、表記の技能、また句読点・段落・語句の用法・敬語・要約等、表現の技能、あるいはワード・プロセッシングに要求される漢字表記・熟語の知識などがある。しかしこれらはビジネス文書の作成において要求される技能であると同時に、国語表現の基本的・具体的技能でもある。よって国語表現の教育においても、文書管理・秘書実務との相乗効果を期して、これらは文章表現・口頭表現教育の一連の課程の中に位置付けて修得されるべきものである。こうした基本的技能を修得し、正確かつ適切で、達意を旨とした機能的表現能力を養成すること——それを教科教育の第一の目標として挙げることができる。

しかしながらそれだけではない。秘書として、ビジネスに携わる者として、また社会人として、広く社会的貢献性のある国語の表現力を身につけるためには、技能的修得を重視するだけでは不足であろう。周囲の状況に対して広い視野をもち、的確に判断し、自分自身の考えをもち、それを説得力をもって表現するという、表現主体の形成が必要であろうと考える。つまり表現主体の形成をも表現教育の一環として位置付けて教育すること、それをもう一つのねらいにしたいと思う。

3. 文章表現教育の実践的展開——小論文作成を中心に——

文章表現と口頭表現という二分野をカリキュラムとして構成していくことにおいては、どちらを先行させるか、という問題がある。現行のテキストもほとんどが二分野に分けて構成されているものの、両者の教育関係に触れるものはない。しかし実践的教育を目指す場合、どちらを先行させるかは、どちらが基礎教育となるか、という認識において決定されなくてはならない。まだそのことについて確定的な論があるように見受けられない状況であるが、筆者は基礎教育を文章表現教育に置く立場を取っている。

文章表現（書く、読む）と口頭表現（話す、聞く）の関係については、澤田昭夫氏の次のごとき見解が参考になろうか。

「話す」ことはやはり、第一に文法、論理、レトリックの問題です。その意味でよく「書く」ことのできる人はよく「話す」可能性をすでにもっているといえます。よく「書く」人は必ずよく「話す」とは申せません。なぜなら、「話す」には「書く」とは多少違う技術が必要だからです。しかし、ほんとうによく「書く」人なら、多少の注意をすれば必ずよく「話す」ようになれるでしょう。なぜかという、よい話を作る手順とよい論文を書く手順、よくできた話の構造とよくまとまった論文の構造とは、根本的には違わないからです。そもそも「話す」「聞く」というのは、「口で書く」「耳で読む」ことだといえましょう²⁾。

筆者が文章表現教育を先行させるのも、氏の見解のごとく、書くことと話すこととは基本的に共通すると考えるからである。すなわち文章表現においても、口頭表現においても、題材の選定、主題の決定、材料の選択、論理の展開、表現・文法の技術など、共通の基本が認められるのである。

しかるになぜ書くことから入るかという、口頭表現の学習が瞬時に消え去る音声を媒介とした聴覚に依る学習であるのに対して、文章表現の学習は、定着した文字を媒介とする視覚による学習だからである。つまり文章表現の

学習は、必要に応じた時間をかけ、繰り返し検討・修正・確認を重ねることが容易であり、より教育的効果を上げることができると思うのである。さらには文章表現を修得した上で口頭表現の学習に移行することにより、文章表現との比較において口頭表現の特性を認識することが容易になり、明確に要領を指導できると考えるのである。

さて文章表現指導の実践的展開を具体的に述べよう。授業は演習による修得をねらいとするので、単元としては「文章を書く」という実習目標を設定する。その前提の下に、さらに基礎的な知識・理論を組み込み、いくつかの演習を重ねて、目標を達成するよう指導のプログラムを用意する。

「文章を書く」という実習目標において、まずどのような文章を書くことを要求するのが有効であるか、という問題がある。それは秘書科の学生にとっていかなる表現能力を身につけることが必要か、という根本的な問題である。前節に教育のねらいとして、達意を旨とする機能的表現を身につけること、および状況や事実を的確に判断し、自分の意見をもつという表現主体を形成することを述べた。その両方の能力を養うべきことを考慮して課題とする文章を選定する。筆者は小論文と報告文を選定し、初めに小論文(縦書き)の作成を基本的演習を含めて実施し、次にその実習を踏まえて報告文(横書き)の作成を実施してみた。

そこで授業の実践的展開と指導の要点について述べることにする。

〈*〉 常用漢字ミニテスト……実習

〈1〉 文章作成準備実習……実習

〈2〉 文章作成の手順について……講義

〈3〉 実例文による文章作成上の理論の確認……講義

〈4〉 原稿用紙の使い方……講義・実習

〈5〉 第一実習、小論文の課題の提示と文章作成……実習、授業時間外に行う。

〈6〉 表記・表現・文・文章……講義・実習(悪文訂正など)

〈7〉 小論文(アイディア・メモ, アウト・ライン共)の提出とグループによる評価会および実習者の自己評価・感想のまとめ……実習

〈8〉 指導者による朱筆と評

〈9〉 全体的講評, 模範文の提示……講義

〈10〉 第二実習, 報告文の課題の提示と文章作成

〈11〉 評価会と評価

——以上前期——

〈12〉 報告文を読み上げスピーチに発展させる。

——以下後期——

以上が文章表現指導のプログラムの概要である。もっとも、考えられる順序は一つではない。推敲過程の学習を中心にする方法も有効であろう。しかし学習者は大学生であり、指示されたことを理解して実践に活かす能力と意欲は高い。よって準備段階を綿密に指導しておくことにより、それを踏まえて実習に入ることが、学習者の意欲・意識を刺激し、実習段階においてより高い成果が得られるとの感触を得ている。書き直しを重視する方法は、効果が期待されるよりも新鮮さを失い、意欲の減退に繋がる恐れもあるので、その点でも準備段階の指導の方が重要であると考え。また準備段階で基礎的事項を押さえておくことは、評価段階における他者の文章を評価すること、および他者の評価に対する本人の理解を助けることにおいても有効性がある。

次にプログラムの順序に即して、指導の要点を指摘していく。

〈＊〉 常用漢字ミニテスト

これは毎回実施する。常用漢字・同音異義語・異字同訓語・四字熟語などを演習のテキストを用いて行う。出題・採点は学習者に順番に担当させ、かつ重要と思われる語句について調べたことを発表させる。また実施したあと出題担当者には、出題の漢字、調べた語句、実施して気付いた点・感想などをレポートにして提出させる。主体的に漢字表記に取り組む意識を高めたいというのがねらいである。担当者のおおよその反応は、「受け身でテストを受けるよりも、出題したりポイントとなる語句を調べることで漢字を積極的に学習する大切さを痛感した」とか、「採点することで間違い易い字の傾向を知り、自分自身の漢字表記に対する態度を反省できた」といった感想が多く、ねらいは概ね成果を挙げているようである。

〈1〉 文章作成準備実習

文章作成の実習に入る前に、現段階における学習者の表現力と技能を知るために(かつ若干の指導を含めて)、四百字詰め原稿用紙1枚程度の文章を書かせる。最初の時間を利用するので、入学に対する感想や抱負でよいだろう。指示はアイディア・メモをとってから書くこと、および原稿用紙に書くに当たり題目・所属・氏名等の位置を指示する程度にとどめる。書かれた文章について、段落・構成・文体・表現・原稿用紙の使い方などに関して気付いた点を指摘し、これからの学習への導入とする。

〈2〉文章作成の手順

文章を書くという作業を前に、もっとも基本的なこととして、文章作成の手順を講義する。手順を括弧付き数字で示しつつ、留意点を指摘する。

(1) 何のために書く文章であるか、目的を把握する。

手順の最初として、何を目的とした文章を書くか認識し、目的に応じた文章を選定する。目的により様々な種類の文章があることと、それぞれの特性を解説する。

(2) 何について書くか、題材を選定する。

題材は「書きたい」という意欲をもって書けるものを選ぶことを認識させる。安易に選ぶべきではなく、ものを書くという根本的意欲に結びついて、初めて書く作業への本格的取り組みが可能になるのであり、意欲をもって書いたものであればこそ、読み手に感動を与える文章に繋がることを理解させる。

もう一点は、完成度の高い作品に仕上げるためには、枚数・時間などの物理的制限や、自分自身の能力および知識の限界を考慮する必要があることを理解させる。いかに意欲があっても、制限や限界を越えるものを選べば、完成度は低くなる。制限や限界を考慮して、題材をどこまで絞るかが秘訣であることを理解させる。

(3) 何を言いたいのか、主題を決定する。

文章の最大の欠陥の一つは何を言いたいのか分からないということである。その欠陥から免れるためには、題材を選定した段階で、早期に主題を決定しておく必要がある。書いているうちに言いたいことが出てくると安易に考えて取り組むことが、構成や展開の破綻、長すぎる文、文のもつれなど様々な失敗を引き起こすのであるから、正確で分かりやすい文章を書くという、最大の目的を達成するために、主題をまず決定し、それを展開するために論の構成があることを認識させる。主題を決定したら、それを主題文としてまとめしておく作業を勧める。主題文を結論に活かすことができれば、少なくとも何を言いたいのか分からない、といった文章にはならないであろう。

また主題の意義を理解させたい。主題は、個性・独自性に富み、かつ客観性と妥当性をもって、社会に対して積極的意義を有するものであることが望ましい。学習者は個性・独自性を重視するが、それが文章としていかなる現れ方をすればよいか、明確に理解していない場合が多い。とかく独特の表現、意表をついた主題に驚き、一人よがりなものを個性として容認する傾向に陥りがちである。文章を書くという行為が対他的なものである以上、その主題

は社会的意義を有するものであることが望ましく、ありきたりに過ぎるものでは意義は薄い。個性的・独自性といって一人よがりなものであったり、他人には無関係なものであってはやはり意味がない。その個性や独自性を客観性かつ妥当性をもって主張する時、説得力をもって読み手の納得が得られ、新たな価値を社会に提出することになるのである。

(4) 何を用いて書くか、材料を選定する。

主題を引き立たせ、説得力をもつ文章になるには、どのような材料を用いるかが、大きな役割を果たす。材料が適切で上質であればあるほど、インパクトの強い、説得力ある文章になる。材料は文章の種類にもよるが、思考、体験、本や資料から得た知識、取材、調査などから広く求め、主題を効果的に導き出すために取捨選択する。自分の狭い知識や体験で済ませるのではなく、広く材料を求め、客観的資料を導入することで説得力が出ることを理解させる。

またこの段階は題目をあらかじめ決めることのできる段階でもある。

ここまでは頭に浮かぶ様々なアイディアや材料をアト・ランダムにメモにしておくアイディア・メモの作業を勧める。概して、これまで学習者は原稿用紙を前にしてすぐに書く作業に入っていた経験が多い。そこで、文章を書く前の準備の仕方を指導することが必要かと思う。アイディア・メモとは、澤田昭夫氏の表現を借りたものである³⁾が、実は普通、論文を書く場合などいきなり書く作業に入らないで、頭の中で、あるいはメモを取るなどして行っている作業でもあり、その大切さを認識させることでもある。

この段階までにメモを眺めつつ、題材を選定し、主題を主題文として用意し、題目を決め、材料を取捨して選定し、その作業を通じて、補うべき材料をさらに用意したり、全体の構想を練るのである。しかし、学習者はとかく捨てるのを惜しむ。それは構想が頭の中で漠然としているせいでもある。色々材料を用いれば内容が豊かになってよいものになると思いがちであるから、よく検討させる必要がある。

(5) 全体の構成と段落を考え、アウト・ラインを作成する。

主題・材料が選定された上で、次にそれをどのような順序で展開させたらよいか、段落と文章の構成法について解説する。

段落は、段落の意味、設け方、段落相互の関係、意味段落と形式段落を適宜設けることなどを理解させる。段落の長さには文章全体の調子・主題との関連があることを様々な実例で理解させるが、学習者は初歩段階として、まずは基本的なところで、構成による段落の設定や、四百字詰め原稿用紙では

1 ページに最低 1 段落は設けるという基本を踏まえることを指示する。

次に段落のまとまりが全体の構成の中でどのような部分を担うか、文章の構成法を解説する。構成法については、基本的な序論・本論・結論の三段構成を理解させる。起承転結の四段構成が基本だと思っている学習者が多いが、実際には四段構成で文章を構成するだけの理解および修得はしていない。基本が三段構成にあること、四段構成が三段構成とどのような関係にあるか知る必要がある。

序論については、単に書き起こしというのではなく、問題提起、結論の示唆など、読み手が論に沿って読み進むことを容易にする役割があることを留意させる。学習者は書き起こしという理解の下に、印象的な冒頭を用意することはよく配慮できるが、論全体の中で果たすべき序の重要さに気付いていないことが多い。また結論の段落をしっかりと設けること、これも案外実際には失敗している。主題文を活かして結論を明確にすること、今後に残した問題点の示唆など、結論で述べるべきことを理解させる。

段落と構成の関係を踏まえアウト・ラインを作成する指導をする。文章の成功・失敗の最大の要因は何といっても、文章の展開の正確さに関わる。何を言いたいのか、結論はどこにいくのか、それがあやふやな文章が一番まずいわけであり、文章がスムーズに展開するためにはアウト・ラインをしっかりと組み立てる作業が不可欠である。その段階で、過剰な材料の整理や不足な材料を補充すること、および主題に向けて論が展開しているか、熟考させる。実際の仕上がりを見ると、やはりアウト・ラインが大まかなものは展開がまずく、また過剰な材料を詰め過ぎたものは主題が効果的に現れない、という欠陥となって現れる。

(6) 下書き

アウト・ラインに肉付けする要領で下書きをすることを指導する。その際、アウト・ラインを修正する必要も生じることを示唆する。

(7) 推敲

推敲段階の指導で必要なことは、漠然と見直すのではなく、何を観点として見直したらよいか、具体的に示すことである。そのためにはチェックすべき観点を用意してやることであろう。チェック・ポイントは学習者が利用して効果を上げるために、なるべく具体的であること、全体から表記の細部に至る細かなポイントであることを配慮する。筆者は平井昌夫氏による観点⁴⁾を用い、それに多少補正を施して用意した。その項目は以下のとおりである。

- ① 文章の中心となる考え（書きたいこと）がはっきり書いてあるか。

- ② 書き足りないところ（材料）はないか。
- ③ よけいなところ（材料）はないか。
- ④ 極端に過ぎたり，読み手を不快にさせたりするところはないか。
- ⑤ 人に訴えるものがあるか，説得力をもって納得させるものであるか。
- ⑥ 文章の組み立て，論の展開は効果的か。
- ⑦ 段落はきちんと取れているか，長過ぎたりしていないか。
- ⑧ 段落相互の関係はよいか，繋ぎの言葉は適切か。
- ⑨ 書き起こしと結びの文は効果的か，問題提起や結論は明確にされているか。
- ⑩ 主語と述語のかかり受けは正しいか。
- ⑪ 文と文の繋がりのおかしいところはないか。
- ⑫ 長く続き過ぎる文はないか。
- ⑬ 「だ・である」体と「です・ます」体が混乱していないか。
- ⑭ 言葉の選び方，使い方は適切か，間違いはないか。
- ⑮ 漢字の誤りはないか。
- ⑯ 句読点の打ち方・記述記号の使い方・原稿用紙の使い方は正しいか。
- ⑰ 全体として読みやすさ，分かりやすさへの配慮が払われているか。
- ⑱ 自分が読んでも面白いと思えるか。

このチェック・ポイント表は課題提出の後，学習者同士で互いに読み合い，評価し合う時にも利用するので，プリントにして各自に渡しておく。

(8) 清書

書体は楷書にすること，文字の大きさ，およびペン書きと修正について指導する。ペン書きは社会に出てからのためでもあるが，読みやすいことが第一であることを理解させる。同時に，鉛筆書きで最後まで書き直しが可能であると思って安易に取り組むことが，結局はよいものに仕上がらないことに繋がるので，清書に臨む時点では自分が納得したものに仕上げておく心構えを指導する。

〈3〉 実例を用いて理論の確認をする。

〈2〉の段階で文章作成の手順について講義を中心に理論と留意事項を指導した。次に理解を定着させるために，具体的な実例によってそれらを確認していく。その際，実例に何を用いるかに配慮を要する。学習者がこれから実習するために有効な文例であることが望ましい。そのための適切な模範文捜しは指導者の肝心とすべきところである。専門家の文章はややもすれば個性が強く，段落も意図あって短かったり，表現も極端を銜う傾向がないわけ

ではない。専門家の文章でも、学習者に効果の上がる適切なものを日頃捜しておく必要がある。

しかし、それ以上に学習者にとって効果の上がる実例は、学習者と同じ立場で書いた文章である。指導者の成果が現れている学生の文例をいくつか示し、推敲で示したチェック・ポイントに即して、その成功している点（必要に応じて改めるべき点）を説明し確認させる。また例文にアウト・ラインを添えて示し、よく配慮されたアウト・ラインと例文を比較して、その作成の仕方、重要性を理解させる。

またここで手順の説明段階では欠落していた文・表現・表記などについての留意点を補うことができる。もっともこれらの指導は重要なので後に〈6〉の段階として授業を設ける。

同じ指導者による優れた成果を実例に示すことにはいくつかの利点がある。学習者は自分自身がこれから仕上げるものの、ある程度の青写真を見ることができるわけであり、どのように書いたらよいのか、どのようなものに仕上がるのか、といった迷いや疑問が払拭される。実例を踏まえ、それを超えるべき自分の文章の仕上がりを目指して、意欲的に取り組むことができるのである。実際、実例を外に求めた年度の学習者より、前年度の学生の文章を実例にして指導した年度の学習者に、より意欲的な取り組みと、一定のレベルを越えたものを全員が仕上げるという結果が得られた。

〈4〉原稿用紙の使い方

学習者は原稿用紙を使った経験はあるが、まだ不十分であり、書く作業に入る前に丁寧な指導の必要を痛感する。そこで実際に原稿用紙を用いて演習を行う。尾川正二氏の「原稿用紙の使い方」などが参考になる⁵⁾。1マス当てるべき句読点・括弧・記号、2マス当てる記号、行末が中止・終止の場合に句読点・閉じる括弧を行末の1マスに入れること、改行の行頭を1マス空けること、数字・アルファベットの書き方等々、縦書き・横書き双方の相違も実習する。一度実習しておくことによって基本的な誤りは激減する。

また同時に記述記号の機能や表記も指導する。学習者は記述記号を使いたい気持ちがある。しかし正確な機能や記述の仕方を知らないために、本格的な文章を書くとなると臆する傾向にある。実習することによって、自信をもって積極的かつ効果的に使いこなす成果がみられた。

〈5〉課題の提示と文章作成

以上の準備段階を踏まえ、課題を示し、原稿用紙・枚数・形式などの指定を行い実習に入らせる。文章の作成手順に従って作成することを課すので、

アイディア・メモやアウト・ラインの作成と提出も指示する。

小論文の課題の与え方には色々あろう。大きな課題を与えて、題材は各自に絞らせるか、絞った題材を課すか、また、学習者にとってどのような課題が相応しいかなど、考慮すべきことは多い。筆者は取り組む学習者の積極的な主体性を引き出すために、大きな課題を課し、題材を学習者に選定させてみた。また、内容は学習者が社会の今日的な問題を考えるものを課した。例えば、「女性の生き方」・「人間と科学」など大きな課題を与えて学習者が各自に題材を選ぶようにさせたところ、「女性の生き方」の課題に対しては「女性の社会進出」・「働く主婦」・「家事の本質」・「お茶くみ」などの題目で論文が書かれた。また「人間と科学」の課題に対しては、「オゾン層の破壊と人間の行方」(他に様々な環境破壊が取り上げられた)・「医学の進歩と人間の生命」・「スポーツ科学の進歩と人間の能力」・「ファジー商品と生活」・「OA 機器と人」・「自動改札」・「古いミシン」などの題目で、科学の発達と人間の環境や心身の関わりを具体的に論じていた。

〈6〉表記・表現・文・文章

学習者が授業外で文章の作成に実際に取り組んでいる段階であることを踏まえて、ここで実際に起こり得る様々な表記・表現の誤りおよび悪文の例⁶⁾を取り上げ、訂正・添削などの演習を行う。表記・表現・文・文章についての正確な知識と理解を得、文章を洗練させる技術や注意力を身につけさせるのがねらいである。

誤字・漢字にすべき語、縦書き(または横書き)数字の誤記、口語・俗語・片仮名の乱用、接続語の安易な用い方による誤り、「そして」「ほかに」など不用意に用いがちな言葉、「このように」など安易に用いるが実は対象不明な場合が多い指示語、文末の常体と敬体の混乱、「思う」の多用など犯しがちな悪文、同じ内容や同じ言葉の繰り返しによる冗長さ、文のもつれ、長過ぎる一文、主語・述語、修飾語・被修飾語の不適切な呼応、段落の設け方など、様々な誤例・悪例を示して学習し、実習に活かすよう指導する。

〈7〉小論文の提出および評価

提出された小論文(アイディア・メモおよびアウト・ライン添付)の評価、後始末は習熟度を高める上で大事な段階である。そこでまず、学習者達が互いに評価し合う機会を設ける。自分の作文を評価してもらうと同時に他人の作文を評価するのである。ねらいは、複数の人から評価を得ることによって客観的に自分の文章のよい点、不備な点を知ること、また他人の文章を評価する作業を通じて、今まで学習した注意事項をさらに活用して修得すること、

またここで新たに、他人の文章を評価する作業を学ぶことなどである。評価され、また評価するという学習は、社会に出てからも有用であろう。

学習者は評価し合うという作業はほとんど初めて行うことである。自分のものを人に読んでもらうことに慣れていないので、抵抗感がないわけではない。また他人を批判したり傷つけたりすることを恐れる。よって、評価会のねらいを十分に理解させることと、客観的方法で評価できることを認識させることが大切である。客観的に優れた点・誤りを指摘することによって、評価された者のよきアドバイスになることを知り、かつ自分が勉強させてもらうという意識で評価することを学ぶ。評価された場合の意識も同様である。またその際、客観的な評価表現や対人関係を重んじて励ましとなる表現ができることを身につける。

評価の作業を行わせる指導で大切なことは、評価が客観的になされるために、その基準となる観点を用意することである。これは推敲におけるチェック・ポイント表に沿って実施すればよいであろう。自分のものを評価したのと同じ基準で他人の作文を評価するわけである。評価はできるだけ具体的にその箇所を指摘することを指導する。具体的に指摘されないと、その評価が役立たない恐れがあるからである。なお評価会は1グループ5人ぐらいを目安として行う。グループ内で互いに回しながら読み、評価者は1人の論文に対してレポート用紙1枚を用い、記名して、観点の項目に従ってコメントしていく。1人の論文に4人の評価が得られるわけである。評価会の最後に、各自、自分の論文に対する評価に目を通し、今後留意すべきことや感想を自己評価としてレポートにまとめ、小論文・他者の評価表とともにこれも提出する。

実習作品とそれに対する評価を一例、示してみよう。「人間と科学」という課題（四百字詰め原稿用紙2枚）による小論文とその評価である。

オゾン層の破壊と人類の行方

人類の未来というものに、重苦しい不安を抱いているという人は多いだろう。ここ数年、マス＝メディアにおいて様々な公害・環境破壊が報じられている。これらの全ては、あくまで人類の誇る「科学」というものの力であり、人類が地球上で豊かに生活することの副産物なのである。

オゾンとは、酸素分子に太陽からの紫外線があたることによって反応してできた、 O_3 という分子である。そして、成層圏内のそのオゾンが特に濃い層をオゾン層という。近年、そのオゾンが減少する傾向にあるのだ。これは大きな環境破壊の一つとして深刻に取り上げられている。な

ぜならば、オゾン層は、太陽の紫外線のうち生物に有害な短波長の成分を吸収してくれるからである。オゾン層が破壊されるということは、すなわち生物に有害な紫外線が地上に降り注ぐということである。その結果、皮膚ガン発生率の増加、白内障の増加、免疫機能の低下はもちろん、農作物の収量やプランクトンにまで影響する。地球上の生態系を狂わせてしまうのである。

オゾン層破壊の原因とされる、クロロフルオロカーボン（一般的にはフロン）は、発明された当時は画期的なガスとしてとても喜ばれた。いつも科学は人類の希望だったのである。しかし、私たちはその両刃の剣＝科学で、自らを深く傷つけていたのである。それも、科学という希望に目がくらんでいるうちに、だ。オゾン層の破壊だけではない。多くの公害や環境破壊が今の地球に存在する。今、人類は危機に瀕していると言っても過言ではないと思う。私たちは生き残るためにそれを深く認識し、正しい対処をしていくように努力するべきだ。人類は希望であり、また凶器であった、その「科学」をいかにして扱うかによって、その存続と滅亡とを左右されることになるのである。

上記の論文に対する評価者4人の評価を評価表の項目に沿ってまとめてみよう。表現も評価者のままである。

- ① 人間が「科学」をいかに扱うかによって、地球と人類の存続と滅亡が左右されることを認識しなくてはならない、という警告がはっきり述べられている。
- ② (1)書き足りないところはない。私たちが言葉は知っていても説明できない、オゾン層やその害が具体的に詳しく説明されており、オゾンの有する価値がよく分かった。
(2)もっと身近な所からこの問題を考える視点が欲しい。「地球の存続と滅亡とを左右する『科学』に対して、自分はどうかあるべきか」という意思が含まれるとよいと思う。
- ③ ない。
- ④ ない。客観的事実とそれに対する意見が書かれている。
- ⑤ ある。「科学」は私たちに希望を与え、一方で公害・環境破壊を引き起こしている、今私たちは「科学」をどう扱うか考えなくてはならないと強く訴えている。最後の主題文が印象に残り、考えさせられる。
- ⑥ 書き初めに問題を示し、二段落にオゾン層を取り上げ、具体的な説明と価値、および被害が詳しく述べられ、三段落に科学と人類の関わりと

全体の結論が述べられていて、説得力のある組み立てになっている。

⑦ 三段落の最後を一つの結論の段落にしてもよかったのではないか。

⑧⑨は⑥に同じ。

⑩ 正しい。

⑪ ない。よく繋がっていて一気に読める文章である。

⑫ 最後の一文が長いかなと思う。しかし切れないのでこれでいいかなとも思う。

⑬ きちんと常体で一貫している。

⑭ 言葉の選び方が慎重で、かつ適切。「両刃の剣＝科学」、「希望であり、凶器である」、「副産物」といった表現が効果的である。

⑮⑯ ない。

⑰ グローバルな問題だけに堅く難しくなるのではと思ったが、そういうこともなく読みやすい。専門的なことも分かりやすく表現され、引き込まれる展開である。

挙げた例文は表記・文について難点の少ないものだったので、そういう点の指摘がない評価となった（表記や文におかしいところがある場合、その指摘はよくできていた）。しかしまだ一段目に「というもの」が3回出てくると、二段落目への繋ぎの言葉が欲しいこと、最後の一文が「その」の繰り返しによる冗長さがあること（⑫に指摘がある）など難点がないわけではない。指摘の不足は朱筆で補う。優れた点はよく評価されている。②の(2)の評は、この文章はこれで完成度が高いので改作すべき指摘とはなり難いが、実習者に比較的こうしたグローバルに見る傾向に偏る姿勢があるのであれば、今後の一つの注意点にはなるだろう。本人は自己評価で、自分の思考の立脚点への反省として受け止めている。環境破壊を取り上げた論文は多かったが、中でこれは一つに絞って詳しく論じ、そのため他の環境破壊を含めてその恐ろしさを十分推測させ、警告をすることにおいて成功している。また課題をよく消化し、括弧なども効果的に用いている。

＜8＞指導者による朱筆と評

指導者は全ての提出物（アイディア・メモ、アウト・ライン、小論文、他者の評価表4枚、自己評価）に目を通し、朱筆を加え、批評を添える。複数の評価は指導者一人の評価より見逃しが少なく、また幅広く有効である。しかし指導者はさらに全体に目配りし、それぞれの学習者に対応して、指摘不足があればそれを補い、かつ、よい点を評価して励ますなど、今後の文章作成に対する目安を明らかにしてコメントする。

〈9〉全体的講評、模範文の提示

実習最後の仕上げとして、表記・表現・文・論の展開・内容などに関して気付いた点を指摘し、また総評をする。さらに模範として成功例をいくつか取り上げ、全体の場でその成功点を確認し合う。課題の消化の仕方から、論の組み立て、文・表現・表記など細部にわたって、気付いた点や成功の秘訣を解説して実習の締め括りとする。

〈10〉第二実習、報告文の課題提示と実習

以上〈1〉から〈9〉までのプログラムにおいて第一実習である小論文の作成を終える。この後、評価を踏まえて書き直すという作業を行うことができれば一層効果的であろう。しかし時間が限られている場合、書き直しにこだわるよりも、むしろこうした評価を新たな文章の作成に活かすことの方が学習者の意欲を高めると思われる。そこで筆者は第二実習として横書き報告文の作成を課した。さらに報告文を次の学習单元である口頭表現学習のスピーチに発展させる意図もあつてのことである。

自己の主張を中心に展開していく小論文に対して、報告文はある事柄を自己の見解に即して客観的に報告するものである。ねらいはなるべく色々な文章を書いてみることに、小論文以上に材料として客観的資料を收拾する作業を行わせること、また小論文を縦書きで実習したので横書きの文章を実習することを兼ねるなどである。報告文はデータの数値などの表記が予想され、横書きがふさわしい場合が多い。題材は各自の関心に即して選定させ、文献資料の表示、必要に応じて図表を文中に用いることなどを新たに課す。

報告文の方が小論文より書きやすいというのが学習者の感想であり、結果、様々な題材によって、社会・環境・食生活・健康・文化・言語・自然科学・スポーツなど幅広い分野にわたる報告文が作成された。例えば介護福祉、手話、出生率の低下、高齢化社会などの問題、朝顔の化学反応やウメノキゴケの分布による汚染認知、危険なダイエット、花粉症、煙草の害、睡眠・汗・涙のメカニズム、パーソル・スペース、差別語、語彙の民族学、帰国子女のバイリンガル、グリム童話の残酷性、樋口一葉の人と作品、週の由来、百合の文化史、オジギソウやヒマワリの運動のメカニズム、魚の眠り、月の満ち欠け、天気予報の当たる確率など、学習者一人一人の旺盛な関心の所在を感じさせるものであった。

小論文と同じ要領で評価会を設け、グループおよび指導者が評価する。

締め括りとして、一人一人の報告文が、様々な分野にわたる有用な内容を有していたことを評価し、学習者全員が報告文の内容を発表し、互いに享受

する機会を設ける。発表は報告文をそのまま読み上げるのではなく、新たに読み上げスピーチの原稿に書き直す作業を経て発表する。つまり、ここからさらに口頭表現学習に発展させるわけである。口頭表現教育については別の機会に述べることにするが、報告文を読み上げスピーチの原稿に書き直すに当たり、その作業の段階で文章表現と口頭表現の相違、および口頭表現の特性を学習し、理解させて、実践的に口頭表現学習に移るのである。

4. おわりに

出来る限り学習者が主体的に取り組み、実習を通じて文章表現の習熟に努めることをねらいとして授業の実践的展開を組み立ててみた。基礎的な知識や表現技能の修得は、大きな単元目標の中に取り入れて、実践的に学習できるように試みたつもりである。実施して感じることは、具体的で綿密な指示をすること、学習の意図をよく説明して理解を得ておくことが効果を生むということである。学習者は与えられた指示や要求は積極的に消化しようとする姿勢がある。また各自の主体性は本来しっかりしたものがある。それを引き出し、自信をもって表現者となれるよう、導くことが肝要であろう。

秘書教育における「国語表現」の教育が、こうした実践的展開でどこまで効果を上げ得るか、さらに思案を重ねて指導の工夫をしたい。

注

- 1) 平成3年10月29～31日、山形市において行われた私立短大秘書教育担当教職員研修会の報告書。
- 2) 『論文の書き方』講談社学術文庫、1997
- 3) 注2)に同じ。
- 4) 「文章評価公式集」、『国文学』24巻8号（学燈社、1979・6臨時増刊『文章表現公式帳』）に掲載。他に「推敲の着眼点」（『国語表現ハンドブック』明治書院、1987）などを参考。
- 5) 『原稿の書き方』（講談社現代新書、1976）、他に『国語表現ハンドブック』（前注4）、『別冊国文学文章表現必携』（学燈社、1984）などを参考。
- 6) 文例は学生の作成した文章などから日頃収集しておく。また注5)の各書、他に『悪文』（岩淵悦太郎編、日本評論社、1960）、『国文学』35巻15号（1990・12臨時増刊『文章作法便覧』）など、例文を収録した参考書は多い。